

研究課題：医療機関がん診療機能の客観的・第三者評価標準システムに関する開発研究

課題番号：H18ーがん臨床ー一般ー018

研究代表者：財団法人日本医療機能評価機構 理事長 坪井 栄孝

1. 本年度の研究成果

がんは我が国の国民の死因の三分の一を占め、高齢化とともに患者数はますます増加している。近年診断や治療技術の進歩により、治癒や延命の可能性が高くなってきた。しかし、全てのがん患者がこの治療技術の進歩の恩恵を受けている訳ではない。がん治療専門施設へのアクセスや診療機能の質には、大きなバラツキが存在する。がん医療機能の均てん化のためには、医療機関レベル・地域レベルで診療機能の評価するシステムが必要だが、現在確立した評価システムはない。他方で一般的な医療機能評価は定着しつつあるので、かかる評価を基盤として、上乘せ基準が作れば、効率的に評価が行われることが期待される。

本研究はがん診療施設の機能評価において、自己評価に加え、量的・質的情報を用いた専門的な客観的評価のシステムを確立することを目的とし、本年度は、前年度までに構築された評価項目体系案について、実際の診療に即した項目を導入するとともに、全国のがん診療連携拠点病院を対象に項目内容の妥当性についてアンケート調査を実施し、評価項目体系の実用面での充実を図ることとする。

2. 前年までの研究成果

本研究は、平成 18 年 4 月から開始された。初年度には抗がん剤治療を中心としたがん診療機能評価指標を標準的手順に基づいて作成した。また、前年度には、放射線治療・病死診断・緩和ケアを中心としたがん診療機能評価指標を標準的手順に基づいて作成し、がんセンター病院、大学病院、がん診療連携等における試行調査（書面評価、訪問評価、訪問施設での討議）を経て、評価プロセスと結果に関する情報に基づき検証することにより、評価指標体系を改訂した。また、協力の得られるがん診療施設 5 施設において、がん診療機能の実態を把握し、より客観的な評価体系の妥当性を検証した。

3. 研究成果の意義および今後の発展性

本研究では、がん診療に携わる病院について、質的・量的な指標をもって専門的、客観的に機能の評価するシステムを構築してきた。これにより、がん診療機能の評価指標を活用した病院間比較等を通じて、各施設におけるがん診療水準の向上を図ることが可能になる。特に、部門・機能横断的な診療機能や集学的な治療機能は重要である。また、評価や政策に関連して、がん登録の一層の充実も大事な課題である。同時に本研究は、地域のがん診療の評価、分析に基づく地域がん診療の機能分

化・連携の推進に役立つことが期待できる。

また、評価結果のデータの蓄積は、各医療機関におけるがん診療機能の情報提供のあり方の検討に一次資料として活用し得るものとする。評価なくして改善はない。本研究の成果としての評価システムは、効果的な活用を通じて、我が国におけるがん診療機能の均てん化の推進に大きく寄与しうるのである。

4. 倫理面への配慮

ヒト、動物およびゲノムを研究対象としないため、特に倫理問題は発生しにくい。医療機関からデータを収集する際には、個別症例のデータではないデータや症例群の集計値を扱うことを原則とした。

5. 研究組織

研究者名	分担する研究項目	最終卒業学校・卒業年次・学位および専攻科目	所属機関および現在の場所	所属機関における職名
坪井 栄孝 (研究代表者)	医療機関がん診療機能の客観的・第三者評価標準システムに関する開発研究(総括)	日本医科大学、S27年卒、医学博士、放射線医学	財団法人日本医療機能評価機構	理事長
河北 博文	医療政策の視点からの評価項目の策定、改定	慶応大学医学部、S52卒、医学博士、シカゴ大学、MBA、医療経営・政策	財団法人日本医療機能評価機構	専務理事
加藤 裕久	医薬品に関わるがん診療機能評価項目の策定、改定	昭和大学薬学部、S52卒、薬学博士、医薬品情報学	昭和大学薬学部 医薬品情報学	教授
今中 雄一	がん診療機能評価に関わるデータ収集・解析とシステム構築	東京大学医学部、S61卒、医学博士、ミシガン大学、MPH, PhD、医療管理・政策	財団法人日本医療機能評価機構	執行理事